

# 高齢者の自立を支える高齢者用住宅の在り方

## 日英の比較から

Joe Oldman

エイジUK 高齢者住宅シニア政策アドバイザー

**2009**年10月、私は日本の秋田県で開かれた世界高齢者団体連盟(IFA)の世界会議に出席する機会を得た。会議のテーマは「高齢者に優しい街づくり」で、世界各国からの出席者が集まり、高齢者の都市環境の改善について情報交換を行った。

秋田での会議の後、私は日本における高齢者用住宅の実態を調査するために東京を訪れた。滞在中、ILCのアレンジにより様々なタイプの高齢者施設を視察するとともに、行政や建築分野の先生方との意見交換も行った。ここでは、今回訪問した私の経験に基づく個人的な見解を述べたいと思う。

### ■「高齢者に優しい街づくり」

世界各国で高齢化が進む中、変化していくニーズに合わせた街づくりが急務になってきている。特に重要なのは、どの世代のニーズにも合う住居をいかに設計するかという点だ。今回の秋田会議では、日本が介護機器分野におけるパイオニアであり、高齢者の自立した生活を可能にする革命的技術を開発したことが示された。

しかしそういった最新技術を使わずとも、住宅をバリアフリーにするなど、もっと簡単なことで高齢者の自立を支援できることは数多くあるだろう。イギリスにおいて、私たちエイジUKは「生涯住居」というコンセプトを広めている。これは専門家による高齢者用住宅だけでなく、これから建築するすべての住宅を、年齢を重ねても使いやすく調整できる建築様式にしようというものだ。

### ■イギリスの高齢者用住宅(シェルタード・ハウジング)

エイジUKは、将来的に上昇する介護費用の財源について、政府の諮問委員会で見解を述べたところである。皆保険制度を含め、いくつかの選択肢があるが、重要な点は高齢者用住宅や住宅支援サービスによって軽度の要介護高齢者をどこまで「予防」し、医療費や介護費の削減につなげることができるかということである。

日本と同様に、イギリスでも高齢者の多くは持ち家があり自宅に住んでいるが、そのほかに高齢者用住宅に8%、入所介護施設には3.7%が居住している。それに対して日本は入所介護施設については3.5%とあまり変わらないが、高齢者用住宅にはわずか0.9%しか居住していない(図1)。

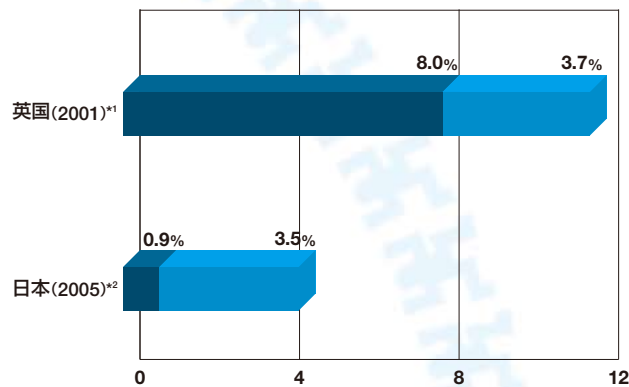


図1 日英における高齢者の居住状況

■ 高齢者用住宅 ■ 入所介護施設

\*1 Elderly Accommodation Counsel (2004) [the older population]

\*2 シルバーハウジング、高齢者向け優良賃貸住宅、有料老人ホームおよび軽費老人ホーム(軽費老人ホームは2004年)

出典: 厚生労働省「第2回介護施設の在り方に関する委員会」平成18年12月15日「我が国における高齢者の住まい等の状況について」

これはつまり、日本の高齢者は自宅によりよいサービスを得ることができるか、あるいは別の高齢者向け住宅があるからなのだろうと推察される。

イギリスの高齢者用住宅は公立と民間に分かれている。軽度から中度レベルのサポートを得て、コミュニティの中での生活を継続したいと希望するすべての高齢者を対象とするものであり、要介護レベルに応じて様々なサービスが受けられる。高齢者用住宅は、医療費・介護費の削減と介護施設(高レベルの介護が提供されるためコストがかかる)への入所期間の短縮に寄与している。現在私たちは、高齢者が自立性を維持しながら、さらに高度な個別介護を受けることができる「エクストラケア住宅」と呼ばれる住宅形態を考案中である。

しかし、現実には介護機器の進歩や在宅介護重視への方向転換により、高齢者用住宅の予算は削減されつつある。

## ■日本の高齢者用住宅

東京で訪れた多くの高齢者用住宅については数々の学びべき点があったが、中でも衛生面での質の高さには特に感銘を受けた。訪問した施設のほとんどはシミ一つなく臭いもなく、とても清潔であった。これは非常に重要な点である。

イギリスの介護施設においては、衛生面でのクオリティの高さは、そこで受けることができる介護のレベルとほぼイコールとされ、よい施設を選択するうえでの一番の判断基準となっている。さらに言えば、東京という街の清潔で整然とした環境が、そのまま介護施設（少なくとも私が訪問した施設においては）にも反映されているのだと思った。

次に、食生活の質が非常に高い。これは私自身も滞在中大いに楽しんだ。食生活は寿命や生活の質、可動性に大きな影響を及ぼすということを経験を通じて痛感した。イギリスでは肥満や逆に栄養不足に関連した問題を多く抱えているが、もし日本と同様の食生活をイギリスの介護施設でも取り入れることができれば、その恩恵は計り知れないほど大きなものになるだろうと思われた。

一方、玄関に段差があり、靴を脱いで上がるという伝統的習慣が日本にはあるが、これは高齢者や障害者に影響があるのではないかと懸念された。私が訪問した施設では、玄関をバリアフリーにし、靴を脱ぐ場所には境界線をつくることでこの問題を解決していた。しかし、大多数の日本の高齢者は伝統的な建築様式の家に住んでいるので、高い段差は自由に動くことができない人はもちろん、車椅子の人々にとっても不便だろ



高齢者向け優良賃貸住宅で入居者にインタビューするOldman氏

うと思う。イギリスでも、重い玄関ドアや段差は高齢者にとって大きなバリアになるため、最近は伝統的な木製のドアを、メンテナンスが楽なプラスチック製のドアに取り替える人が増えている。このドアは、入口に段差をつくらなくても隙間風が入らない工夫として、下部に縁がついている。やはり、デザインや伝統は二の次にして、居住者すべてのニーズに合わせたバリアフリー設計にする必要があるのではないだろうか。

視察したある施設では、重度の認知症の入居者が、非常に気さくに、そして誇らしげに自分の部屋を見せてくれた。また、共有スペースでは、刺繍、織物、陶芸等、入居者が興味を持って活動に参加しやすいように様々な工夫が施され、スタッフが熱心に対応していた。かわいい犬までペットとして飼われており、いきいきとしていて温かな雰囲気があった。イギリスにも同様の施設はあるが、入居者同士の交流が少なく、生活リズムにおいても一日中刺激が少ない、あるいはまったくないといった施設が数多く存在することと比べると、人間らしい暮らしが営まれているという印象を持った。

## ■日英の共通課題

### 1. ケアワーカーの研修と社会的地位

イギリスと日本に共通する課題としては、ケアワーカーの研修と社会的地位が挙げられる。これはイギリスでは特に大きな問題となってきている。ケアワーカーや看護師の多くは専門的な研修、特に認知症ケアに関する研修を受けておらず、低賃金で、研修やサポートを得られる機会もあまりない。日本も同じ状況にあるのではないか。高齢者人口がますます増加する中で、今後日本はケアワーカーの深刻な人材不足にどう対応するのだろうか。イギリスでは今日、ケアワーカーを外国人に頼っているが、質の高い介護を行うのに必要な研修や報酬を十分に彼らに提供しているとはいえない。これは、将来日本でも取り組まねばならない問題になってくると私は思う。

### 2. 収入による格差

次に、収入や社会的地位による格差の問題。今回、高所得者向けの有料老人ホームを視察したが、ここでの生活の質は

本当に素晴らしいものであった。超高級の設備を備えているだけでなく、医療・介護施設との連携もしっかりしている。建物の中には立派な共用スペース、二つのレストランとスポーツクラブがあり、また様々な屋内外のプログラムが用意されている。このホームの経営者はロンドンの裕福な地域でも同様の組織を運営しており、今や有料老人ホーム業界は国境を越え、富裕層を対象とした市場でグローバルに運営されている。

しかし私が問題だと思うのは、高齢者の大多数を占める低所得層から中流層が住む一般の住宅や高齢者用住宅の質だ。イギリスでは収入による格差が大きくなってきており、将来的には、最も弱い立場におかれた人しか公的な高齢者用住宅の利用やサービスを受けることができなくなる可能性がある。

### 3. 生活空間

さらにもう一つ、空間基準の問題がある。私が訪問したグループホームは非常に窮屈そうであった。入居者はホームの中の急な階段を苦勞して昇降しなければならず、居室も狭い。居室内では十分な生活空間を確保するために、毎日布団をたたみ、押し入れにしまわなければならない。

イギリスでも同様にスペースの問題を抱えている。国の住宅建設達成目標があり、それをクリアするために床面積を縮小して、狭い土地になるべく多くの建物を建てようとしている。さらに建築費が高騰しているため、空間基準を軽視する方向性もあり、高齢者用住宅の設計に悪影響を及ぼしている。こういった懸念材料がある一方で、介護施設に関する規定が改正され、高齢者は介護施設において十分な居住空間とプライバシーを与えられなければならないとされた。実際、狭さを理由に高齢者用住宅への入居を断る高齢者や、寝室を別々にしたいと希望する高齢夫婦が増えている。

### 4. 入浴

訪問した多くの施設には共用浴場があった。これも、イギリスとは大きく異なる点である。イギリスでもかつては大きな共用浴場があったが、私が知る限りではいつも一人ひとりプライベートで入っていた。もちろん、リラックスしたりおしゃべり

したりする手段としてジャグジーは人気があるが、基本的にはイギリスの高齢者は他人と一緒に風呂に入ることは好まない。また、日本では、重度の障害を持つ高齢者が容易に入浴できるような介護機器が発達しているということに非常に感心した。



「座シャワー」を体験するOldman氏

入浴やシャワーで清潔を保つことは人間の基本的な権利であり、高齢者の尊厳や幸福に大きくかかわっている。エイジUKは、高齢者が体の自由が利かなくなっても入浴しやすい環境を整備するために、すべての住居は1階にシャワーを取り付けるべきだと主張している。

### ■ 高齢者自身の声を反映

私の最後の訪問は、後援団体があり北欧スタイルで革新的な「コハウジング(共生型共同住宅)」だった。ここでは、高齢者自身が住居を管理することができ、気の合う友人や、同じ趣味を持つ者同士や、同じような職歴を持つ者同士で生活をともにする。現在、多くの高齢者が自分達の住居や受けるサービスについて発言権を持ちたいと思っているが、ほとんどの人は変えたくても様々な障害があって無理だとすぐ諦めてしまう。私は、「コハウジング」の優れたシステムに大変感銘を受けた。この質の高さは入居の待機者リストの多さからも窺い知ることができる。日英両国において、高齢者用住宅の設計に高齢者自身の意見が反映されるというのは非常に重要なことだと思う。

高齢者向けの住宅サービスに関しては日英両国に共通するところが多く、また直面している課題も共通点が多いことを理解することができた。今後さらに高齢者住宅に関する研究を深め両国へ還元して行くためにも、是非日本の地を再び訪れたいと思う。